連載――44

音は語る

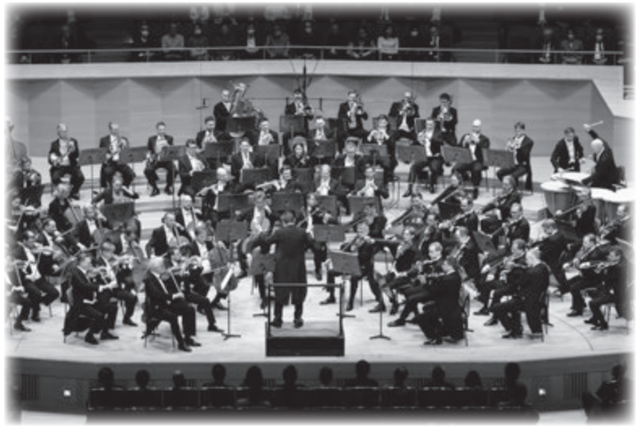
文 藤盛一朗

ウィーン・フィルのブルックナー5番 ひなびた味わい 聖なる響きと一体に

ブルックナーの音楽は、多様な魅力を放つ。その一つは、ひなびた田舎道を行くような素朴さだろう。都会風の洗練とは異なる独特の味わい。30年前の1995年11月、聖フローリアン修道院を訪れた時のことを思い出す。中心市のリンツも、決して大きな都会ではなく、ドナウの流れとまちのたたずまいが調和しているように感じたが、修道院へ向かうと、あたりは畑の広がる農村地帯だった。ブルックナーは、この地方から出て、その地に戻った。晩年はウィーンの名士として脚光を浴びながら、死後は聖フローリアン修道院に葬られることを望んだ。

白眉の第2楽章 楽想の変転も自然

ウィーン・フィル来日公演の交響曲第5番は、ブルックナーの音楽のこうした地方性を実感させる表現の連続だった（11月11日、サントリーホール）。白眉は、第2楽章である。冒頭のピッツィカートのさびしさは、晩秋の野面のよう。オーボエの旋律も素朴で、柔らかな日差しを思わせる。それを受けるファゴットはあたたかく、クラリネットの音は、農夫の敬虔さを思わせる。「牛を引いた人が歩む。あたりにはぶーんと、独特の匂いも漂う。その人が『グリュースゴット』（オーストリアのこんにちは、のあいさつ。「神の祝福を」が原意）とあいさつする」と、下野竜也がインタビューで語ったが、まさにそうした雰囲気が音から伝わってくる。



ブルックナーの交響曲第5番を演奏するウィーン・フィル
指揮をするティーレマン
（いずれも撮影：池上直哉　提供：サントリーホール）

そこに、弦による第2主題がフォルテで入ってくる。コラール風の聖なる響き。この変転も、ウィーン・フィルの演奏では実に自然と感じられる。カトリックのオーストリアやイタリアの道のそこここには、聖母マリアの像や十字架のキリスト像が置かれている。路傍のお地蔵さまの感覚で、農夫はそこでひざまずき、祈る。そんなイメージを感じ取る。

ウィーン・フィルの第1ヴァイオリン奏者で、団長を務めるダニエル・フロシャウアーは、指揮のティーレマンについて「ウィーン国立歌劇場への出演を通じて、まずはオペラの結びつきが強かった。今回のブルックナーも、オペラさながら、音楽の描く場面を絵がみえるように明快にみせた」とたたえる。

伝統に敬意をみせたティーレマン

一方でティーレマンからは、この楽団への深い敬意がのぞいた。「自分はベルリンの出身である」という演奏伝統の差異について自覚があり、自身の解釈に染め上げる姿勢はとらなかった。「今回は奏者たちと、ピンポンのようにやりとりをした。大きすぎるフォルテは避けた」と終演後に語っている。大きな体躯を折り曲げ、かがみこむようにして弱音を求めたり、敬虔な旋律では特別さを深めるために一瞬の「間」を取ったり。そこここで指示を出しながらも、かつてのフルトヴェングラーやカラヤンと同じように、ベルリン・フィルやドイツの楽団とは異なるウィーン・フィルとの協同作業の結晶がこの日も感じられた。

ブルックナーは、聴衆の好き嫌いが分かれる作曲家と評される。ブルックナー好きの中でも、第5番の全曲の始まりは、妙なる美しさの第4番や第7番、宇宙的な第8番、第9番と比べると、たまらなく好きだという人はさすがに多くないかもしれない。この開始や、延々続くと感じられる終楽章のフーガ風の曲構成は、そもそも何を表しているのだろうか。

今回の演奏では第1楽章導入部の上昇楽句が抑制の効いたフォルティッシモで奏でられ、続く金管コラールは、聖堂のパイプオルガンのような深い響きを生んだ。問いの回答が得られたように感じられた。それは、信仰者のブルックナーが抱く畏怖の感情であり、ミサ曲の栄光の賛歌にあたる神への賛美と感謝ではないだろうか。そして、木管楽器の上行や下行旋律から伝わる「ミステリオーソ」（神秘）の感覚も、ウィーン・フィルの伝統から生まれる自然だが、稀有な表現だった。

ベルリン・フィル率いるペトレンコ「第2の故郷はオーストリアの地方」

ベルリン・フィルを率いて来日したキリル・ペトレンコは、2024年のブルックナー生誕200年に交響曲第5番を指揮している。楽団が公開しているインタビューが興味深い。ペトレンコは「第二の故郷はオーストリア。しかも私もブルックナーも、その地方の出身だ」と語っている。

ペトレンコは、旧ソ連のオムスク生まれ。今のウクライナのリヴィウ出身の父はオムスクの楽団のコンサートマスターであり、母は、温かな人柄でも知られた博学の音楽学者だった。ソ連崩壊前夜の1990年、オーケストラのポストを新たに得た父とともに、ペトレンコは、オーストリアの南西端、フォアアールベルク州に移住し、スイス国境に近いフェルトキルヒで音楽の勉強を続けた。ペトレンコはブルックナーの音楽について「帝国ともウィーンとも異なる。谷や山々など圧倒的な音楽風景。フォアアールベルクのような土地や人々になじみがあれば、もっと理解できる。ブルックナーを指揮する時、私はフォアアールベルクで過ごした日々を思う」と話している。

ベルリン・フィル来日公演を指揮するペトレンコ © Monika Rittershaus

そのペトレンコは今回の来日公演で、ヤナーチェクの《ラシュスコ舞曲》、バルトークの《中国の不思議な役人》組曲、ストラヴィンスキー《ペトルーシュカ》という唯一無二の組み合わせの公演を指揮した（11月19日、サントリーホール）。西欧から見た「東」の国々の音楽であり、それぞれのかけがえのない「地方性」は、ロシアによるウクライナ侵攻も意識したプログラミングだったと受け取れる。

民族色豊かな《ラシュスコ舞曲》《ペトルーシュカ》は早春の絵巻

演奏のまれな《ラシュスコ舞曲》は、ドヴォルザークの《スラブ舞曲》を思わせた。ヤナーチェクは「いや、ボヘミアではない。モラヴィア（チェコの南東部）の音楽です」と言うかもしれない。いずれにせよ、民族色の豊かな演奏で、なんでもドイツのベルリン・フィル流にしてしまうのかといえばまったくそうではない。なにしろペトレンコとベルリン・フィルは2024年、チェコの魂というべきスメタナの《わが祖国》を「プラハの春音楽祭」で演奏し、誇り高い人々の心を揺り動かしている。

この楽団の持つ威力をみせつけたというなら、《中国の不思議な役人》だった。だが《ペトルーシュカ》でも再び、ロシアの早春の祭り、マースレニッツァに題材を得た作品の民族・地方色の気配が濃厚となる。楽団の誇る奏者たちの妙技の連続というより、ロシアの生活を知るペトレンコがみせる音の絵巻は、光の力を増しつつある太陽に照らされた雪原やまちの市、人々の表情などが聴く者の目に浮かぶように展開される。

ペトレンコのまなざしは、ロシアやウクライナ、そしてチェコ、オーストリアといった国々の中でも独自の地方色をもつ人々や文化、生活に向けられている。民族的にはユダヤで、さまざまな地で多様な人々と交わってきたペトレンコには、こんなに豊かな互いの文化をなぜ、尊重できないのだろうかという素朴かつ強固な信念が存在すると感じられた。それこそがこの公演全体から発せられたメッセージであったと思う。 M